

抱きしめるほかなかったー女性国際戦犯法廷傍聴記

熊谷 博子

『世界』(岩波書店) 2001年5月号 掲載

彼女たちの言葉ができない私は、気持ちを伝えるために、ただ近寄って、涙を浮かべてじっと抱きしめるほかなかった。その心と身体でよくぞここまで生きていてくれた、という、何とも言いようのない感謝の思いであった。

きっとこの日のために、そろえたのだろう。地味だがきれいな中国服に身を包んだそのおばあさんは、南京大虐殺で、7歳の時に父の前で母とともに強姦され、父は殺され、母はショックで亡くなった。額には、その時日本兵にナイフで切られたという傷跡が、まだ残っていた。午前中に証言したもう一人は、自分の体験を話すうちに思い出したのか、壇上で気絶して倒れてしまった。

第1日

『日本軍性奴隷制を裁く2000年「女性国際戦犯法廷」』は、20世紀も終わろうとする昨年12月8日から始まった。韓国、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)、中国、台湾、フィリピン、インドネシア、東チモール、オランダ、マレーシアの9つの地域から64人の被害女性たちが集まった。

私自身、こうした証言を聞き続けるのは、つらい作業であった。子どもの頃に自分が受けた性暴力の感触が、皮膚感覚でよみがえってしまった。

東京・九段会館の大ホールは、3階席まで埋まり、2000人が集まった。目立つのは、チマチョゴリに身を包んだハルモニ(おばあさん)たちだ。韓国からは220名が参加し、うち21人は被害を受けた女性だ。北朝鮮から11名、2人の被害者。そして中国からは28名、6人。台湾は63名、12人。フィリピンから42名、15人、インドネシアからは16名、4人。東チモールは6名、2人。オランダは3名、2人の被害者が出席した。

壇上右側に4人の判事。裁判長は旧ユーゴ国際戦犯法廷前所長のガブリエル・カーク・マクドナルド氏。さらに、ロンドン大学国際法教授のクリスチーナ・チンキン氏、国際女性法律家連盟会長でアルゼンチンのカルメン・マリア・アルヒバイ氏、ケニア人権委員会委員長のウィリー・ムトンガ氏だ。

開廷が宣言された。



「歴史の中で無視された、日本軍の性奴隷にされ、強姦され、そして殺された20万人以上の女性たちがいます。これは国家や国際機関による法廷ではなく、民衆による法廷です。東京裁判が問わなかった、そうした女性たちに対する個人および国家の責任を、国際的な人道法に照らして裁こうというものです」

この「民衆法廷」に法的拘束力はない。しかしここで被害の真相を明らかにし、日本政府に法的責任をとらせるようにすること。そして被害に遭った女性たちのために正義を回復すること。さらに戦時性暴力に対する「不処罰」の悪循環の鎖を断ち切ること。それが今も世界中で起きている、紛争下の女性への性暴力をやめさせることにもつながる。

続いて首席検事であるパトリシア・ビスアー・セラーズ氏（旧ユーゴ・ルワンダ国際戦犯法廷ジェンダー犯罪法律顧問。米国）が、国際法上の個人の刑事責任についての起訴状を読み上げた。

当時の法に照らして裁くものだ。彼女たちは日本軍の性奴隷であった。奴隷制が犯罪であるのは、1926年の奴隷条約以来、国際的な慣習法である。戦場における強姦も、1907年のハーグ陸戦条約で禁止されている。女性を奴隷にしたうえに強姦した。

「慰安所の建物はもうありませんが、証言する人々の中には傷痕として残っています」「彼女たちにとっては慰安では全くありません」

同じく、首席検事のウスティニア・ドルゴパル氏（オーストラリア・フリンダース大学国際法助教授）が、日本国家の責任について、起訴状を読み上げた。

日本政府の行為は、国際法に反するものだ。これまでいかなる補償も果たしてこなかった。国連の勧告も無視した。アジア女性基金（女性のためのアジア平和国民基金）という、民間からの贈り物だけで処理しようとしている。適切な補償を行うことを要求する・・・。

首席検事が作成した共通起訴状では、天皇裕仁、松井石根、畑俊六、寺内寿一、板垣征四郎、東條英機、梅津美治郎、小林躋造、安藤利吉、山下奉文の個人と、そして日本政府が被告として起訴された。その他に各国別の起訴状で、岡村寧次、南次郎、松山雄三などが起訴され、被告の数は30人を越えた。

日本政府にも、首相宛てに招待は出したが、返答はなかった。被告も弁護人もいない。公正な審理の助けとして、今村嗣夫弁護士が参考人としての意見を述べた。被告は全員死亡している、半世紀前の犯罪は多くの場合は時効である、また、昭和天皇は戦後、憲法によって国民統合の象徴とされたので、「有罪」の場合の社会的影響も大きい、それにもかかわらず有罪判決を出すのであれば、相当の合理的理由がなくてはならない。

この後、南北朝鮮の共同起訴状の発表となった。韓国と北朝鮮は、これまで共同で作業を進めてきた。中央に首席検事と書記席。右側の判事に向い合うように左側に証言者の席。その後ろに守るように両国の10人の検事団が座った。

厳密な法廷規則のもとに審理は進められた。検事たちは証拠文書や写真を提出。本人の証言のほか、ビデオでの証言を援用しながら、追及。時おり、判事が検事や証人に質問をする。

スクリーンに1枚の写真が映し出された。1944年9月、激戦地の中国・雲南省の松山（拉孟）で連合軍に保護された4人の朝鮮人「慰安婦」たちだ。右端の女性は、疲れ果てすすけた顔にぐったりと目を閉じ、いかにも大儀そうに、ほとんど臨月と思われる大きなお腹で、岩にもたれかかっている。

朴永心（パク・ヨンシン）さん（79歳）は、これは私です、とはっきり言った。

「17歳の時です。日本の巡査が長い刀を持って現れ、もっといい所があると言われ、南京に

行きました。若春という日本名をつけられました。4年ほどいてビルマへ。そこには日本人もいました」

彼女は、ビルマのラシオに2年いた後、さらに松山（拉孟）へ、そこから昆明の収容所へ送られた。そこで出血し手術され、子どもは死んだという。

午後もまた、ハルモニたちが証言に立った。

金英淑（キム・ヨンス）さん（73歳）は、当時まだ12歳だった。

「日本の巡査が来て、お金が儲かるいい仕事があると言ったので、汽車に乗って瀋陽と一緒に行きました。日本軍の中にある小さな家で、5メートルの高い塀があり、監視人もいました。

ナカムラという軍人が、『おまえきれいだな』と言いました。私は12歳で彼が何をしようとしているのかわかりませんでした。服を全部脱がせました。入らなかったのにナイフで臍を切り、私は気絶しました。血が出ました。痛くて痛くてどこが痛いのかもわかりませんでした」

「おまえは朝鮮人だが、天皇のためにやれ。できなければ肝臓をとってやる、と胸をナイフで切られ、傷が残っています」

河床淑（ハ・サンス）さん（72歳）は、あれからずっと中国・武漢にいる。

「1日20人から30人の兵士たちを相手にしました。外出はできず、鉄格子が窓にありました。17歳で私はまだ処女でした。父親よりもっと年とった人が一番先だったんです。2日目からは兵隊ばかり受け入れなくてはなりません。今は朝鮮語があまりできません。日本人が私を連れてきたのです。私は祖国に帰って死にたかったのです」

慰安婦の8～9割が朝鮮人慰安婦だった、と言われている。でも正確な数は分からない。足手まといになれば殺され、病気になればそのまま置き去りにされたからだ。満州から4年がかりで歩いて故郷に帰った人もいる。戻っても家族に追い出されたり、梅毒が子どもに影響したり、精神を侵された人もいる。多くの人が自殺を試みた。そして誰にも言えないまま心と身体に傷を持ちながら亡くなっていく。

韓国では198人の被害者が見つかり、すでに48人が亡くなった。公開証言者として名乗り出た人は65人。北朝鮮では218人の犠牲者が見つかり、50人が亡くなった。公開証言をした人は43人だ。

検事団が結んだ。

「被害者には時間がない。しかし加害者にも、謝罪の時間は残されていないのです」

最後に、川口和子弁護士らの日本検事団による、天皇および国家責任に関する立証が行われた。日本が起訴したのは、日本人「慰安婦」に対する加害責任者である。私は聞きながら、国家がこれほど広範囲に、組織的にかかわっていたのかと、愕然とした。

第2日

2日目、中国検事団が登壇した。

1932年1月、上海に最初の慰安所が設置された。1937年12月13日、南京に侵攻。この時のすさまじい大強姦は、現地で“予想以上”の反日感情をもたらした。海外でも報道され、政府は日本の評判が国際的に落ちるのをおそれた。それ以降、強姦を防止するため、中国全土におびただしい数の慰安所が設置されたのである。兵士が性病にかかり、士気が落ちるのも防ごうとした。

とても小さなおばあさんが壇上で話し始めた。山西省の村で、共産党員として抗日ゲリラ活動に参加していた万愛花（ワン・アイファ）さん（75歳）だ。

「14歳の時です。体験したことは心の中にありますが、すぐには言葉になりません。どこからどこまで話せばいいのか、今悲しみでいっぱいです。(泣く)

捕まって洞窟に連れて行かれ、奥の部屋で無理矢理に服を脱がされました。声を出すと殺すと脅されました。5～6名の日本兵が同時に入ってきて、いっせいに私を強姦しました。監禁の間、毎日そうでした。抵抗しましたが、従うしかなかったのです。逃げて村に戻ってまた捕まり、また逃げました。

3回目に捕まって、冬なのに、強姦された裸のまま庭に引き出され、そのまま木に手を縛り付けられ、つるし上げられた状態で暴行を受けました。意識不明になり川の中に、ほうり込まれました。1本の骨は曲がったままで、165センチの身体が、今は147センチにちぢみました」

立ち上がり、手を泳がし、何かを訴えるように叫び続け、気を失って倒れてしまった。救急車で運ばれていった万さんを心配しながら、次の証言が始まった。

袁竹林(ユエン・チューリン)さん(78歳)は、結婚していて子どもが1人いた。

「ホテルの手伝いの仕事だと知合いの女性に言われ、連れて行かれたのが日本軍の拠点でした。中にあった慰安所の経営者は日本人でした。帰してくれというと、殴られました。コンドームを支給され、マサコという日本名をもらい、表札をかけました。

日本兵はチケットを買って、いつも長い列ができていました。その時18歳でした。下が痛くて痛くて、座ることも寝ることも自由にできません。一度逃げましたが、すぐ見つかり、拷問を受けました。殴られた頭の傷が今も残り、夜は落ち着いて眠れません。

経営者の奥さんは、私たちが妊娠しないよう性器の中に、液体の薬を強制的に入れました。血がたくさん流れて、痛みが1カ月以上続きました。身体がぼろぼろで血だらけのことが多かったです。

15カ月いて、金は一銭ももらえませんでした。その間に娘は飢えて死にました」

楊明貞(ヤン・ミンジュン)さん(69歳)は、日本軍が南京に入ってきた時、まだ7歳だった。

「家にある金目のものを全部うばいとして、母を強姦しました。そしてまだ幼い私のズボンをおろし、強姦しようとしたのです。止めようとした父は殴られ、ナイフで首を3回も切られました。

次の日です。母と家に隠れていましたが、ナイフを持った日本兵が母を強姦して、私も強姦しました。怪我をしている父の目の前でです。泣いて抵抗しようとしたらナイフで2回も3回も顔を切り付けられました。母はショックで失明し、精神もおかしくなりました。父が死に、母もまもなく死にました。

孤児になり、町をさまよいました。同じような女の子たちがいました。おとうさんおかあさんのことを考えると胸が痛いです。思い出すともうこれ以上私は何も言えません。皆さん分かって下さい」

彼女はウェーという声をあげて泣いた。涙でしばしば証言は中断された。会場も私も泣いた。



中国では、判明した被害者総数22名、公開証言した被害者18名という。

午後、フィリピン検事団と9人のロラ（おばあさん）が壇上にあがった。古びた大きな洋館が映し出された。ルソン島マパニケ村の「バハイ・ナ・プラ（タガログ語で「赤い家」）」、日本軍が駐屯していた場所だ。この村は、抗日ゲリラ抵抗軍、フクバラハップの影響下にあった。

今もここに住む女性たちが、次々とビデオで証言していく。

1944年11月23日。朝から機関銃の音がして、日本兵が家に来て家族を連行しました。兄たちは逃げようとしたが撃たれ、殺されました。日本兵は、友人のおとうさんの性器を切り取り、その口の中に押し込みました。悲鳴をあげて泣いていました。見ていられませんでした。別の男の人の肉を切り取り、ほかの日本兵に手渡しました。

男たちは尋問され、家族の目の前で殺され、村全体が焼かれました。

兵士たちは私たちがバハイ・ナ・プラに連れて行きました。好きな女を部屋へ連れていき強姦しました。

午後の太陽の下で、服を脱ぐように言われ、2人の兵士に部屋に連れて行かれました。兄たちがされたことを思い出し、沈黙を守りました。

木の下に連れて行かれ姉と強姦されました。私たちは泣くことしかできませんでした。こんな子どもになぜそんなことをするのかわからない。13歳でした。

この日1日だけで、何十人もの人々が強姦された。そのほとんどが子どもたちだった、という。ベレン・アロンソ・サグムさん（70歳）は生き残った。

「結婚しましたが幸せではありませんでした。夫は家に帰ってくる度に、残り物の犬の方が、残り物の人間よりまだましだと言いました」

他の島々でも同じようなことが起きた。

トマサ・サリノグさん（72歳）さんは、パナイ島に住んでいる。

「13歳でした。生き残るためにいろいろなことに耐えてきました。求婚者をすべて断わりました」

検事は言う。

「女性たちの苦しみを、本当に知ることはできないかもしれない」

261名の被害者がわかっている。

つづいて台湾。福建、客家、原住民族出身の3人の女性が証言をした。

慰安婦を集めるには2つのルートがあった。軍が台湾総督府に要請。総督府は国策会社である台湾拓殖株式会社に依頼。または台湾総督府が地方政府に指示し、地元の警察や官吏が集める。組織的に上から下まで動いている。

判明した被害者の数は70名で、すでに31名が亡くなっている。39名が公開証言をしている。

高寶珠 (カオ・パンチュ) さん (79歳) は、役所の人に行けばわかると言われ、軍用トラックに積み込まれた。

「着いて初めて、慰安所で、もう家に帰れないとわかったのです。日本軍がたくさんいて、逃げられる状態ではなかった。口答えをすれば、殴られ刀で脅かされ、殺すぞ、と言われました。自殺しようとしたがうまくいきませんでした。広東から香港、シンガポールそしてミャンマーと、8年間いて、敗戦後ベトナムへ行きました。

17歳から私の人生はないのも同然です。汚い女とみなされて、生活のすべもないままこれまで生きてきました。

日本の人と次の世代に知ってほしい。あなたたちの親や祖父の世代にはこのようなことをしてきたのだと」

廬満妹 (ル・マンメイ) さん (74歳) は、食堂の給仕をしないかと連れていかれた。

「17歳でした。軍艦で海南島へ行きました。生きていくためにやむをえず彼らに従いました。逃げたいと思っても到底できなかつたです。

慰安婦だったことがまわりに知られ、非常に苦しかったです。結婚したかったけれど、結婚したいと思った人に、過去のことを知られるのが恐かったです」

タロコ族出身のイアン・アバイさん (71歳) は、3回離婚した。すべて慰安婦の過去を知られたからだ。何度も自殺しようとしたが、子どもがいたのでできなかった、という。

第3日

組織的な調査の進んでいないマレーシアはビデオ証言のみとなった。

ロザリン・ソウさん (84歳) は、25歳の時、子どもたちから引き離され、午前3時にペナンのトンロックホテルへ連行された。3年間の拘禁生活の中で、子どもを産んだ。そして戦後、一人でその子どもを育てあげた。

「マレーシアでこの問題を話すのは本当に難しいです」

そしてオランダの証言が始まった。

ヤン・ルフ・オヘルネさん (77歳) は、旧オランダ領ジャワ島で育った。日本軍が上陸し、収容所の生活が始まった。19歳だった。

「3年たった時です。17歳から28歳の女はすべて登録させられ、並ぶように言われました。顔や足を見られ、最後に10人が残されました。皆処女でした。母にさようならを言う間もなく連れていかれた家は、全体が売春宿として作られていました。写真を撮られ、日本名を与えられ、壁に貼られました。

食堂のテーブルの所に皆で寄り添って集まり、祈りました。それしかできなかったのです。

太った男が私の服を脱がし、身体に刀をはわせました。私は恐怖で身体が動かなくなりました。

風呂へ行き、何もかも流したくて身体を洗いました。兵士たちは列を作って待っているんです。一晩中でした。少女たちは隠れようとして皆泣いていました。自分が醜く見えるよう髪を切り

ました。

3ヶ月たち、突然収容所に戻されました。母は私の髪を見て、何が起きたのか気づきました。母と父には一度だけ言いました。自分を汚れた恥ずかしい人間だと思い、誰にも言えませんでした」

もう1人、証言席に座っていた白髪のオランダ人女性は、彼女の言葉に自分自身を託したのか、横でじっと黙っていた。

私は毎日こうした証言を聞きながら、次第に自分自身が強姦されているような気持ちに陥ってきた。

続いて登壇したインドネシアの検事団が、ある文章を証拠として提出した。

当時の海軍主計将校、後の首相、中曽根康弘氏の回想録、『終わりなき海軍』から「二十三歳で三千人の総指揮官」だ。

ボルネオのバリックパパンに到着した時のことだ。「三千人からの大部隊が、やがて原住民の女を襲うものや博打にふける者も出てきた。そんな彼らのために、私は苦心して慰安所を作ってやったこともある」

マルディエムさん（71歳）は、ボルネオの劇場で働くように言われた。

「身体検査を受けて、他の47人の少女とともに行きました。20の小さな部屋に分かれていました。私の部屋は11番でモモエと名づけられました。

たった13歳だったんです。12時から3時の間に、6人の男が私を強姦しました。医者もです。兵士たちは2回ずつ強姦したので、3時間で11回強姦されました。泣きました。血が流れて床にしたたり落ちていました。

経営者は日本人のチカダで、自分も順繰りに少女たちを強姦しました。3年の間、12時から5時まで兵士の相手をし、5時から7時は休みで、また12時まで。泊っていく人もいました。動物のように扱われました。中絶は病院で薬を与えられ、とても痛かったです。でも効かなかった。手術で赤ん坊を引き出され、5ヶ月でした。その時は生きていました。私に何ができたでしょう」

スハナさん（74歳）は、16歳の時、家の前で髪をつかまれジープに乗せられた。将校にも軍医にも強姦された。3年監禁され家に戻った時には、抗議した父は路上で日本兵に殺され、母はショックで病気になって死んでいた。

インドネシアでは、約1000人の女性が被害を届け出、4名が公開証言をしている。

東チモールの被害者たちが証言するのはこの法廷が初めてだ。年はわからないが、強姦されたのは初潮の始まる前だったという。この日のため、山奥の村から何日も歩いて出てきた。

エスメラルダ・ボエさん（70歳前後）の両親は、殺すと脅され、仕方なく子どもを引き渡した。4人の日本兵にタピオカ畑から連れ出された。

「押し倒され強姦されました。私の家族を奴隷のようにし、妹も姉も死にました。死ぬまで強姦した兵士の名は分かりません。でも私をやったのはシマムラ、カワノ、ハラダです。昼は農場で労働をし、夜になると名前を呼ばれました。行かないと、殴られたり、焼かれたりしました。四つ目の家に女性がいっぱいでした。」

マルタ・アブ・ベルさん（70歳前後）は近くの慰安所へ連行された。

「幼かったので、何が起きたのかよくわかりませんでした。最初の日、10人の男たちに次々と強姦されました。順番が終わると再びやった男もいます。私の膣からは血が滴り落ちていました。もう歩けなかった。悲しかったです。いろいろな村から集められた女性がいました。一つの部

屋に何人も、あちらの隅、こちらの隅に。抵抗すると首を絞められました。私は目を閉じていたので他の女性のことを見ることはできませんでした」

見物で日本に来たのではない。真実を語りに来たのだと、何度も何度も訴えた。

ポルトガル、日本、インドネシアに占領された東チモールでは、これまで十分な調査の時間がなかった、と言う。現在15人の被害者が見つかった。

いよいよ皆が固唾を飲む中で、加害者である元日本人兵士が登場した。2人とも、中国・山東省を転戦していた。まちで見かける、ごく普通のおじいさんである。

金子安次(80歳)さんは、慰安所は強姦防止には全く役立たなかった、と言う。

「兵隊の給料は安く、一等兵で8円80銭、上等兵で11円でした。慰安所で1円50銭払うのだったら作戦に行つて強姦すればただだと思いました。

産めよ増やせよ、と言われていたのに、戦地へ行ったら、上官の命令で、女は子どもを産むから殺せ、子どもが大きくなったら我々に反抗するようになる、というのです。どうせ殺すなら自分もいつ死ぬかわからない、どんどん強姦した方がいい、そのつもりで強姦しました」

鈴木良雄(80歳)さんは、1940年に入隊した

「一個大隊の駐屯する所には必ず2軒以上の慰安所があり、軍医が週に1回、性病の検査をしていました。結果は会報で兵隊に知らされていたから、管理は日本軍がやったと思っております。

治安地区、準治安地区、敵性地区と三つに分けており、八路軍のいる敵性地区にはいると指揮官は、何をやってもよろしいという指示を出したのです。強姦をやってもよい、という意味です。兵隊たちは誰もかれもが、女を見つければ強姦を繰り返しました。

私もある村で、30歳くらいの女性が、豚小屋で、服に便をなすりつけて隠れているのを見つけ、逆にむらむらと情欲をそそられまして、衣服を全部脱がせ、納屋で強姦をしました。拳銃で脅迫をして、彼女は逃げることもできなかったのです」

1942年に陸軍刑法が改正になり、強姦は1年以上無期の刑となった。強姦が頻発していたからである。

「しかしながら、なぜ私たちが強姦をやったのかといいますと、チャンコロの女をやるのに何が悪い、どっちみち殺すんじゃないか、という気持ちだったのです」

止められるのは残っている私たち以外にない、恥をしのんで証言している、という2人に、会場から拍手が起きた。

私には、自分の体験に加え、もう一つつらいことがあった。祖父が職業軍人で父が軍医であった。中国と東南アジアを転戦した。その場所は見事に慰安所のあった場所と重なる。自分の中に加害者の血が流れている。

こうした被害者、加害者両方の証言を、裏付け、支え、助けたのは、各専門家による証言だった。

1日目は「日本軍の構造」について林博史氏(関東学院大学教授)。2日目は「天皇の戦争責任」を山田朗氏(明治大学助教授)、「慰安婦制度」を吉見義明氏(中央大学教授)が。

3日目は、「トラウマ(PSTD)」についてレパ・ムラジェノビッチ氏(ベオグラード暴力反対女性自立センター)、「国家責任」をフリッツ・カールスホーベン氏(オランダ・ライデン大学教授)。「日本人慰安婦」については、藤目ゆき氏(京都外語大学助教授)からの専門家証言があった。沖縄には、130ヶ所を超える慰安所が確認されている。さらに参考人として、鈴木五十三弁護士が個人請求に関する国家責任について、藍谷邦夫弁護士が、戦争賠償請求について意見を述べた。

そして最後に首席検事の最終論告に入った。多くの公文書は焼かれたが、それでも証拠を完

全に隠滅することはできなかった。システム全体に浸透していたからだ。それを最高司令官が知らなかったはずはなかった、と。

最終日（12月12日）

1日において判決―「認定の概要」の言い渡し―の日を迎えた。会場は日本青年館に移った。海外メディアの数が目立っても多い。まるで報じなかった日本の大メディアがあったのとは対照的だ。

マクドナルド裁判長が、天皇裕仁が有罪であると述べた。その瞬間人々は立ち上がり、ワーッとというどよめく歓声と拍手が巻き起こった。



突然、チマチョゴリを着た小柄なハルモニが、壇上に駆けのぼった。そして、感きわまったように、座り、ひざを折り曲げ、判事たちと検事たちに向けて、何度も何度もお辞儀を繰り返すのだった。

この「概要」で、当時、国家の最高司令官であった天皇裕仁は有罪とされ、日本に国家責任があると認定された。ほかの個人被告を含んだくわしい判決本文は、2001年4月以降に発表される。

この女性国際戦犯法廷を聞き続ける、ということは、彼女たちのつらい体験を追体験する、ということであった。彼女たちの言葉を心の中で反芻する度に、言葉にならないトラウマの巨大な束に突き刺されるような気がした。

私はアフガニスタンの戦場に半年いたことがある。戦場の異常な心理状態は多少はわかる。でも、戦争だからしかたがなかった、というのは間違っている。

「従軍慰安婦」と呼ばれた女性たちが50年の沈黙を破ったことの意味。私も含めた日本人一人一人が、必死に考えなくてはならない。

(写真提供 VAWW RAC)